

## 薬剤師のコミュニケーションスキルは 医師が処方する薬剤数の削減に寄与する

アサーティブネス（他者を尊重しつつ率直に自己表現をするコミュニケーションスタイルで、教育可能なスキルとされます）は、医療の安全性向上に有用とされてきました。本研究では、薬局薬剤師のアサーティブネスが、安全な薬物治療を目的とした処方の適正化と関連することを明らかにしました。

必要以上の薬を飲むことで副作用や薬物間相互作用のリスクが高まった状態をポリファーマシーと呼びます。特に、多くの疾患を抱えがちな高齢者は、服用する薬の数が増えることがあります。このため、薬剤数の削減や代替薬の使用など処方の適正化によるポリファーマシーの解消が重要な課題となっています。

薬剤師は医師が発行する処方箋に基づいて薬物を患者に提供します。その際には、安全な薬物治療を行うため、患者からの聞き取りや記録、検査情報などを基にして、医師に処方の変更を提案することがあります。しかし、医師とのコミュニケーションがうまくいかないと、薬剤数の削減など処方の適正化はなかなかスムーズには進みません。

本研究では、日本の薬局で働く薬剤師にアンケートし、そのアサーティブネス（他者を尊重しつつ率直に自己表現をするコミュニケーションスタイル）を評価しました。そして、自らが医師に提案したことによる薬剤数削減の経験が過去1年間にあるかどうかとの関連を調べました。アサーティブネスは①自己を後回しにする非主張的な自己表現、②自身の考えを押し付ける攻撃的な自己表現、③それらのどちらでもなく相互理解を深めようとするアサーティブな自己表現、の三つの要素で評価しました。解析の結果、アサーティブな自己表現が高い薬剤師ほど自身の提案による薬剤数の削減を経験していたことが分かりました。非主張的な表現や攻撃的な表現については、薬剤数の削減の経験との関連は認められませんでした。

本研究により、薬局薬剤師のアサーティブネスが、医師が処方する薬剤数削減の決定と関連していたことが示されました。アサーティブネスは教育が可能なコミュニケーションスキルと言われています。今後、薬剤師がアサーティブネスを身に付けることで、患者さんの薬物治療の安全性が向上するかどうかを検証することが求められます。

### 研究代表者

筑波大学医学医療系

小曽根 早知子 講師

## 研究の背景

多くの疾患を抱える傾向にある高齢者は、服用する薬の種類も多くなることがあります。多くの薬を服用することで副作用のリスクや薬物間相互作用のリスクが高まった状態をポリファーマシー<sup>注1)</sup>と呼びます。安全に薬を使用するにはポリファーマシーの解消に向けた取り組みが重要になります。

ポリファーマシーの解消には、医師や薬剤師などの医療従事者が協力し、患者さんの体調や希望を考えながら判断する必要があります。特に薬局の薬剤師は、患者さんの薬の状況についてよく知っているため、医師に薬剤数の削減や代替薬の使用など処方の変更を提案をする役割を担っています。日本では2018年に、薬局薬剤師から処方医への提案により薬剤数の削減がされた場合に薬局へ報酬が支払われる制度（服用薬剤調整支援料1<sup>注2)</sup>）もできました。しかし、実際には薬局薬剤師と医師の間で意見が伝わりにくく、ポリファーマシーの解消がスムーズに進まないこともあります。

本研究チームが今回着目したのはアサーティブネス<sup>注3)</sup>という自己表現スタイルです。自己表現する際のスタイルとしては、自己を後回しにする非主張的な自己表現、自身の考えを押し付ける攻撃的な自己表現、それらのどちらでもなく相互理解を深めようとするアサーティブな自己表現の三つがあります。アサーティブネスは、他者を尊重しつつ、自分の感情や要望を率直に自己表現するコミュニケーションスタイルであり、攻撃性とは異なるものと定義されています。

これまでの薬局薬剤師を対象とした研究で、アサーティブな自己表現が高い薬剤師ほど、医師に提案した処方変更の頻度が多いことが分かっています。しかし、薬剤師のアサーティブネスが、自らが医師に提案して薬剤数の削減につながった経験にどのように影響しているのかは明らかではありませんでした。

## 研究内容と成果

本研究では、2022年5月から10月に、日本の10都道府県の薬局で働く薬剤師3446人を対象にアンケート調査を実施し、963人から回答を得ました。過去1年間に服用薬剤調整支援料1を得た経験があるかを尋ねました。また、Interprofessional Assertiveness Scale<sup>注4)</sup>を用いて、アサーティブネスに関連する薬剤師の自己表現スタイルを①自己を後回しにする非主張的な自己表現、②自身の考えを押し付ける攻撃的な自己表現、③それらのどちらでもなく相互理解を深めようとするアサーティブな自己表現、の三つの要素で評価しました。そして、薬剤師自身の提案によって医師が処方薬剤数を削減した経験があるか（過去1年間に服用薬剤調整支援料1を得た経験があるか）との関連性を検証しました。

その結果、薬剤師のアサーティブな自己表現の高さと、自身の提案によって医師が処方する薬剤数が削減される経験が関連していたことが分かりました（オッズ比1.49、 $p=0.042$ ）（表1）。この結果は、医師の状況を尊重しつつ、医師との相互理解を深めようとする薬剤師のアサーティブな自己表現が、医師に処方する薬剤数を減らす決定を促すことを示しています。一方で、主張性の低い非主張的な自己表現や自分の考えを押し付ける攻撃的な自己表現では、医師が処方する薬剤数削減の決定に影響を与えにくいと考えられました。

## 今後の展開

今回の研究では、薬剤師からの提案による薬剤数削減が実現するかどうかは、医師に対する薬剤師のアサーティブな自己表現と関連することが明らかになりました。しかし、薬剤数削減の提案内容や医師の専門分野や経験などが、薬剤師による提案の受け入れやすさにどのように影響するのかは十分に検証されていません。今後、薬剤数削減の提案の実態を解明し、薬剤師のアサーティブネスを向上させる取り組みが医師の処方する薬剤数の削減に寄与するかを明らかにする必要があります。これらを踏まえ、薬剤師が医師と協力して薬剤数の削減を進める方策を検討することが求められます。

## アサーティブネス：Assertiveness

(心理学の分野ではアサーションとも言われます)

「他者を尊重しつつ、自身の感情や要望を率直に自己表現する

コミュニケーションスタイルであり、攻撃性とは異なるもの」

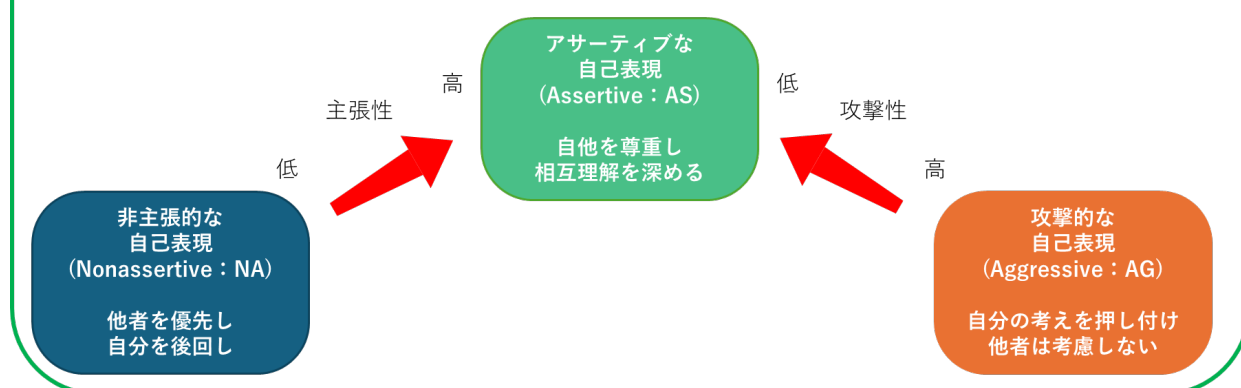


図1 アサーティブネスと三つの自己表現スタイル

アサーティブネスを構成する自己表現には三つのスタイルがある。他者を優先し自分のことを後回しにする非主張的 (Nonassertive)、自分の考えを押し付けて他者を考慮しない攻撃的 (Aggressive)、そのどちらでもなく相互理解を深めようとするアサーティブ (Assertive) である。アサーティブネスとは、他者を尊重しつつ、自分の感情や要望を率直に自己表現するコミュニケーションスタイルであり、攻撃性とは異なるものとされる。

表1 アサーティブネスを構成する三つの自己表現と薬剤師の提案による薬剤数削減の経験との関連

	オッズ比	p値
非主張的な自己表現		
低い群 (≦23点)	対照	
高い群 (>23点)	0.72	0.083
アサーティブな自己表現		
低い群 (≦22点)	対照	
高い群 (>22点)	1.49	0.042
攻撃的な自己表現		
低い群 (≦8点)	対照	
高い群 (>8点)	0.73	0.115

薬剤師の提案による薬剤数削減の経験は、アサーティブな自己表現が高いことと関連していた。非主張的および攻撃的な自己表現は経験に影響していなかった。

## 用語解説

注1) ポリファーマシー 複数の薬剤を服用することで薬物間相互作用による有害事象や副作用リスクの増加、服薬を間違えるリスクなどの問題につながる状態のこと。高齢者では、複数の疾患を治療するために服用薬剤の種類が増加する傾向にあり、処方適正化の必要性が高まる。

注2) 服用薬剤調整支援料1 薬局薬剤師が薬剤数の削減の提案を医師に行い、その提案に基づいて医師が2種類以上の薬剤の中止を決定し、4週間の経過観察の後に薬局が受け取ることができる報酬。患者が安全な薬物治療を受けられるように、薬局薬剤師が専門的な知識を生かしてサポートしたことに対する評価である。

注3) アサーティブネス (Assertiveness) 他者を尊重しつつ、自身の感情や要望を率直に自己表現するコミュニケーションスタイルで、攻撃性とは異なるものと定義される。教育可能であるため、コミュニケーションスキルの一つとして医療専門職への教育に応用されている。

注4) Interprofessional Assertiveness Scale 本邦の薬剤師を対象に開発された、医療チームに参画する場面の自己表現を測定する尺度。アサーティブネスを構成する三つの自己表現スタイルである非主張的な自己表現、攻撃的な自己表現、アサーティブな自己表現について、それぞれ測定できる。

## 研究資金

該当する研究資金はありません。

## 掲載論文

【題名】 Assertiveness in community pharmacists and their experience of pharmacist-led deprescribing: A cross-sectional study

(薬局薬剤師のアサーティブネスと薬剤師の提案による減薬：横断研究)

【著者名】 M. Ishii, S. Ozone, S. Masumoto, and T. Maeno

【掲載誌】 Research in Social and Administrative Pharmacy

【掲載日】 2025年3月6日 (オンライン先行公開)

【DOI】 <https://doi.org/10.1016/j.sapharm.2025.03.002>

## 問い合わせ先

【研究に関すること】

小曾根 早知子 (おぞね さちこ)

筑波大学医学医療系 講師

URL: <https://trios.tsukuba.ac.jp/researcher/0000003954>

【取材・報道に関すること】

筑波大学広報局

TEL: 029-853-2040

E-mail: [kohositu@un.tsukuba.ac.jp](mailto:kohositu@un.tsukuba.ac.jp)